

秋山清自選詩集を 記録する

押切順三

秋山さんのことならせび書かねばならぬとこの評を引き受けてみたものの、情念論みたいなものばかり頭に浮かんで、どう書き出しているものか。こんどのこれは「詩集評」ではなくて、「秋山清」像を彫りおこすことだと、自分で思いこめば、なおさら重荷となつて、彫るところか粘土の粗型さえ造れぬのではないか。

この詩集を通読して思うことは「秋山の詩は近代意識のまれに見る達成である。ほんとうの近代の詩である。」（内村剛介・『秋山清詩集』の解説から）ということに納得する。なるほどそうだと思う。内村氏がさらにこの解説のしまいにこう言う「秋山は、これくら

い簡単なことはないといったことだけは、つまり近代のニヒリズムだけは、超えたのである。」、日本の近代の詩はニヒリズムによって育ったという思いこみが私にはある。そのニヒリズムを超越した詩人が私の前におられる。

私が『コスモス』に加わったのは、一九四九年暮れの「復刊号」からで、その後だつたか一、二度、所用で秋田に来た秋山さんと会った。東京の事務所を訪ねたこともあった。内村氏が言う、ニヒリズムを超えた詩人ということを私なりの印象で言えば、秋山さんはおだやかな並の人であった。並のただの人ということではない、装いも飾りも取り払った、詩人らしくもないがほんとうの詩人なのだ。私は気づいた。秋山さんその頃四十歳半ば、湿っていない乾いた印象だった。今でもその思いは同じだ。その思いがこの評の筋になりそう。

まずは、『秋山清・自選詩集』の記録から始める。A五判函入、一九八四年九月一日発行、頒価三千円、発行者「秋山清・八十の会」、取扱ばる出版、作品は四部に分けて五十三篇、作品名を記録しておく。

一、海峡

「海峡」 「長靴」 「深川」 「母の言葉」 「ク
ロンスタットの敗北」 「死について」 「狛犬」
「菊」 「デモ隊」 「早春」 「早春」

二、象のはなし

「象のはなし」 「野球場で」 「赤いチュー
リップ」 「背なかにはない」 「後退—ある孤
独」 「ある孤独—テロリスト」 「ある孤独—
トリトマ」 「ある孤独—ネコ」 「ある孤独—
愛」 「民衆」 「佐賀平野」 「子守唄」 「ある
孤独—秋田」 「われを上げます歌」

三、ある孤独

「ある孤独—綿羊」 「大石原」 「近江路」
「やさしい心」 「この季節の冬の夜に」 「美
術館の裏手」 「おやしらず」 「春」 「だまっ
ている山々」 「やぶれ鳥—ある孤独」 「ある
孤独—六月十九日」 「ある孤独—銀座」 「あ
る孤独—確信」 「ある孤独—植村詩」 「目ぶ
たをおろしてください」 「波のうた」

四、ふらんす映画のあとで

「桐の花」 「ふらんす映画のあとで」 「反
骨流亡」 「街の会話」 「なぜ、おともせず—
ある孤独」 「一九六九年・ある日」 「半裸」
「朝に押れる」 「赤とブル」 「あんせ」 「色
のない犬」 「盆地」

「自選とともに」というあとがき、そして

「秋山清略年譜」が十三頁。

この「あとがき」は全部写しとおきだすところ。プロレタリア詩への愛着と、詩の自由のための気概を示す。何を自選したか、私はあえて作品名を並べたが、つぎの秋山さんの思いも写しとおこう。

（戦後すーっと、ニッポンの詩の問題とは、詩の諸問題の中の、詩の表現ということのみ問題であった。表現の諸問題が、表現のみの諸問題にすっかり置きかえられたために、われわれの周辺の詩は、遊びの詩にその全精力が転移されてしまった、かの感がある。文学の中でもっとも思想に強烈な詩が、もっともその力の弱い表現の諸問題に席をゆずったとき、ニッポンの詩は詩の政治性と美術性をうしなってしまったのである。

プロレタリア詩が遭遇した政治的な壊滅が文学の喪失に他ならなかったのを思い出して見れば、そのための詩の亡失もすぐ理解できることを私はうたがわなかった。

そして言う、（あの政治をこの政治に換えるのではなく、この文学をあの詩にとりかえるのではないモノを、探さねば、という覚醒を目ざしたい。）

ここは越後の国おやしらず。

汽車は海にせまる山壁に息はきかけて走り人のいない崖下の海岸に

しろい波がくだけている。

あとからあととよせてきてくだけている。）

「おやしらず」の前半、昭和十九年、北陸路を旅する秋山清、列車の窓ガラスにすりよったその額や頬がみえる。秋山の視線の先に波がありそしてその先に戦争がある。戦争を肯定しない緊張が、この十三行の詩として残った。外に誰が、こういう詩を書いているか。この詩に、秋山さんの不同調の思想がこもっている。私は思う。この抒情の緊迫と、うつぼつたる不同調の思いと融合して、戦後、主として『コスモス』における人民詩精神の唱導となった。人民詩精神とは何か、年譜に『コスモス』再刊の趣旨としてつぎのように言う、「人民詩精神」とは、権威権力にゆずらぬ、働くものの自己主張であり、芸術のうつくしさを要望する精神である」と。

私も「詩」をこう理解したい。こういう精神を持ち続けたいものだ。

「背なかにはない」、秋山さんの詩のなか

秋山さんという詩人は「構え」のない人である。詩人の構えも、そして詩にも構えがない。一篇の詩が発表されるまでに当然、推敲や鍛練をへて何がしかの構えが表出しているものだが、秋山さんの詩にはそれが無い。だから推敲されていないなどは、まるっきり違う。秋山さんの詩は、まるで秋山という個人の生理が紡ぐ言葉の糸という感じだ。名詞止めの行も殆んどない。言葉のバネを使うという用語の例も見られない。そんな仕掛けを全く除いて、思想―表出は首尾整えて終りに句読点をきちんとつける、そんなふうの表現である。私もは読んで、まるでウドンをすすめるようにするりと呑みこんでしまう。ひっかかりや棘がないのだ。するりと呑みこんでそれでいい。私は秋山清と生理を共にすることができるのだ。ひっかかりや棘のせいでも、各人各様の思い込みや理解がされてたまるもんか、と言うようである。「生理」とは、手許の辞典を引いたら「生物の生命現象」とある。一つの詩をするりと呑みこめたら、それは秋山清を理解し得ることになる。生理を理解させるために、詩はそうでなければならぬと言うことになる。

秋山さんの詩の用語は一貫して日常語だ。

私はこの作品を第一にあげ、そして一連の「ある孤独」を、そして自選詩集「三、ある孤独」の最後に据えた「波のうた」を私は好きだ。「背なかにはない」この詩は『新日本文学』に発表したものがいわゆる「事件の詩」ではない。事件に触発されたがこれは秋山清「おのれの詩」なのである。ずいぶん力を入れて書いたようだ。「年譜」にも、きちんとこう書き記す。

（一九五四年一月）二重橋で参賀客が圧死する事件発生。彼ら庶民にみる封建的なものを、自身の内部に深く刺殺する思い、で「背なかにはない」を書く。

この年にはこの外に「大石原」「目ぶたをおろしてください」など、いい仕事をいっぱいしているが、この詩にはとくに自負の思いがこめられているようだ。この詩についての私の注釈などは要らぬことだ。この詩が秋山詩の背骨と私は理解する。私は、私の小さい感想を付け加えることにしよう。この詩はこれではじまる。

（背なかにない目がないから。／＼どうして私はうしろからついてくる人たちのことをしつてるだろう。／＼どうしてうしろからついてくる人たちの／＼舌をだしたり指さしたり

二十歳から今日の作品まで変らぬきちんとしてた「日本語」なのだ。漢字の少ない詩だ。私は秋山さんの詩を読んで教えられ、そして自戒してきた。詩人ふうな、気の利いた言葉を書き込んで得意になったりしたが恥しいことだ。そんなのは詩ではなかったのだ。「くらいい」の「昏い」でなければならぬと言ひ張る。「詩人」に会うと閉口する。イメージ論とか修辭学とか、芸とか術とか、「現代詩」というのは何んか賑やかなことであるか。秋山さんは芸も術も使わないのだ。私が先に言った「生理」、つまり秋山さんの詩の場合、「生命現象」の光輝というものでないだろうか、私は思う。

秋山さんに『詩入門』（一九七一年）という本があって、その中の「私の歩み」の項で「客観的で描写的な手法には、意外に強固な主観を必要とすることを知ることができた」と書いている。秋山さんは詩に味つけはしないが、臓器に付着して光を放つアイソトープみたいなもので、強固な主観・独自の個性というものを容易に呑みこませるようにしているのだろう。これは「秋山詩」の詩の仕掛けなのである。

（夜がしらしらにあけると

する／＼いじてく人のわるい狐つらをしつてるのだろう。／＼背なかにない目がないから。／＼私が見えぬのに。）

そして二連では、

（いつも／＼人のうしろからついていって／＼べろりと赤い舌をだした。／＼気どられぬように、げんこつで小づくまねをした。／＼私は、私のことをおもいだしているのだ。）

私にも勿論、覚えがある。卑小なのだ、私は卑小だが「うしろの人たち」が卑小とは限らない、そんなことをという思いが私にもある。「われ」はそうだが「ひと」もそうなのか、秋山さんの思いにゆれるものがある。秋山さんの「まとも」さがゆれるのだ。アナキストとしてのまともさについて、もっと言わねばならぬのだが。

この詩を書いた翌々年、『文学の自己批判』を発表する。一九五〇年から新日本文学会の常任委員として、文学会再建の「実務」に精を出した。実務にうとい連中が多かったらう。口を出すか、金も出さず仕事もせず、民主主義を言うか何をもって民主主義か。そんな手合いのなかで、秋山清は高言もしい泣きごとを並べない、鼻うたをうたい靴音をひびかせながら着実に仕事をした。この詩を書いた

のは秋山清、五十歳のとき。

この詩を載せた詩集『象の話』、これに木暮真人が、とてもいい「解説」を書いている。そのはじめの部分で「アナキストとして詩を書きはじめた秋山は、詩において自分を裏切るまいとし、自分の感情をひとつひとつたしかめ、その目で現実に対決しようとすることに詩人としての生き方をもとめた」、こう書いた。アナキストとしての「まとも」さである。秋山さんは非妥協のなかで自分のなかの「たしかなもの」だけを育てた。木暮の記述によれば、二十歳代後半の秋山さんは小劇団の運営や「解放文化」「文学通信」の編集などに当たり、書くよりむしろオルガナイザーの役割にあつたと言ふ。オルグといえればいわば裏方だ。きちんと路線と方向をきめておいて、各個の力を発揮させそれを連動させるのが役目だ。経営者でないのだから高言も命令もしないのだ。「オルグは五分以上喋ってはならない」というのは、戦後まもなくの茨城・常東農民闘争のさいのオルグ活動家の戒めなのだが（以前「コスモス雑記」に「オルグ考」を書いた）、主役はちゃんとおるのだ。その人たちが奮い立つことがオルグの役目だということ、デマゴグがなんの必要か、という

こと。そういうオルグ論が、秋山さんの「詩」

の主張ともつながって来るように私は思う。秋山さんは、金子光晴から「おっとせい」の精神を吸収したと書いている。「おっとせい」は『鮫』のなかの詩のこと。このことはよくわかる。あの時代におけるこの詩の重さというものはたしかにそうだ。しかし、私のなかにひっかかるものがある。若かった金子光晴の、あのニヒリズム、「俗衆」というのは本音の、腹のその目つきのように思われなければならない。私はむしろ秋山さんのオルグ的健康性というものを評価したい。「背なかにはない」「われを上げますうた」「波のうた」と、読み進むにつれて、内村氏が言う近代性とニヒリズムを超えるということが、次第にわかってきたが、私にはうまく説明ができな

い。私の生理的理解と言ふしかない。

秋山さんは私の詩集にこう書いてくれた。

「たった一人で立っていてもおれは民衆であるのである」。そうです、秋山清は秋山清なのである。

さいきんまったく言っていないほど関係のなかつたろう詩人と、じつは生前会っていたことを思い出したりして、おやと思ったりする。誰にでもあることなのだろうが、別に年をとったわけでもないのに、ちょっと妙な気がする。

遠地さんとは二回会ったことがある。やはりいくらか古いことで、といっても二十五年位前のことで、伊藤信吉さんの荻窪の書齋で初回。そのあとは、新井薬師の喫茶店で、秋山さんが一緒だった。ひどい猫背だったという印象があるのだけれど、合っているだろうか。そして、あることで、遠地さんの原稿をガリ切りしたのだったが、家中探してもついでに出てこない。

ところで、その「遠地輝武研究」第三号が発行された。高田新の追悼号で、編集・発行者は野口清子。発行所も野口方で、頒価三百円である。コスモスでは、野口の他に、西杉夫、松永浩介が書いている。山田今次や、内田麟太郎も書いている。生前詩集を出さなかつたということで、ぼくなどは、初めて高田の詩のいくつかを知ったのである。(J)

インデラガンジーさんの死

野口清子

インデラガンジーさんの死を見た

積み上げられた白檀のほのほにつつまれ

ジャンナム河畔 シャンティバナの火葬場で

その朝

白い布と

三色の花に埋まった砲車は

軍用トラックに引かれ

そのトラックを 陸海空の兵士百人が

綱で引いたと

行進の道筋には そのときも

シークとヒンズー教徒のあらそいは続き

死者はニューデリーだけで

五百五十人が確認されたとニュースは伝えた

戦車や

装甲車が配置され

たくさんの兵士が垣をつくり

葬列は シャンティバナへ

インデラガンジーさんの棺は

長男ラジブガンジーさんや 親族にかつがれ

ユーカリの花でかざられた レンガづくりの

壇上に安置され

古代インドバラモン教典ベーダ朗唱の中

ラジブ首相が手にした たいまつで

白檀のたきぎを積みかさねた

火葬壇に点火した

白い煙りが

青い空に舞い上り

親族 弔問客が燃える火のまわりをめぐる

めぐり祈った

遺灰は 三日目に回収され
ガンジス川にながされ まじわり
永遠に旅立つと

けれども シークとヒンズー教徒の憎しみは
火を吐き 血を流し続けている

四

宮田 正平

地平のはてに B29 の編隊をみとめると
予科練の練習機が いっせいに飛びたち
もはや数すくない戦闘機が

「赤トンボ」を囿に
四散して姿を隠した

雛の命とひきかえに

手負いの素振りをしきりに誇張して
天敵の目をひく親鳥の
命をかけた偽装とはうらはらに

笹舟

学生であった時

軍事教練に抵抗し

しくまれた人民戦線事件で

いわれなく不当に検挙され

「教育召集」の名目で

対ソ作戦要員部隊に編入され

重機関銃を担いで汗だくになり

人殺しの練習に明け暮れて

母を覚えず 兄を失い 父と死別して

天涯孤独

金儲けをようせず 出世に縁がなく

無器用に生きて七十年

ひたすら反骨の思いだけを募らせて

あたかも それは

溪流にもまれ 浅瀬にあらがい

帆はなく 舵もなく

あがきもだえて船体を裂かれ

流されに流されて なお

岸辺を拒否して漂う

笹舟

旭川

木原 実

プラットホームを

おばあさんが歩いてきた。

ずんぐりむっくりの

長いスカート、

大きな丸顔が目もとで笑っている。

若い男が荷物をさげ

息子かもしれない、

ひげのそりあとが青い。

ズボンにリュックの娘が二人

カップの味噌汁をささげてる。

おばあさんが声をかけた。

娘たちがはにかむ。

おばあさんがまた何かいう。

三人で小さな声をたてて笑った。

大雪三号が少しおくれれて入ってきた。

娘たちがのりこむ。

荷物を両手に

おばあさんはデッキの上で

ふりむいて笑顔をみせた。

若い男が片手をあげた。

旭川には

秋の薄日が射していた。

ある帰還

河合俊郎

うす暗い
防潮林をぬけると
いきなり
眉間を射る
夏の光
八月が走る
癒されることのない
過去を問えば
白くかがやく渚に
むっくり起きあがった亡霊は
陸軍中尉の肩章をぶらさげている
軍刀もない
風が緑陰を吹きぬける
浜スゲが芽ぶき

雲が走る

生きて虜囚の辱しめを受けず
このことばかり兵隊たちに教えたおまえは
ガダルカナルの生き残り
頬がこけている
鏡の奥の心をひた隠しに隠し
首をすくめて潮流をやりすごし
投降しようとした兵隊を
背後から撃った亡霊
封印された三九年の恥辱
潮風を拒み
左手に紙巻煙草をくゆらし
死よりも生きることを選らんだおまえは
選択は正しかった
と砂に書く
置き去りにされた部下
いまだに騙され続けている戦死者
岩にぶつかる怒濤の
しぶきは絶叫のごとく

いまなお

八月が走る

八月が躍る

わが反戦―四―(二九八四・八・三二)

還らない馬たち

伊藤正斉

膿のふきでる鞍傷に
銃弾に
どっと倒れこんでいった馬
氷上蹄のするどい一撃の北辺のさけめ
むきだしたおんねんのはぎしり
すすきのむこうの
かえらない馬たち
尾根をこえると

急につめたい風は背におち

かんでんの

ひくい集落がひらけてくる

杉ひのきの目くらむくらい谷みちがはじまるのは

それからだ

おれはなんのためにここにきたのだ

ふたたびすすきのはらがひらけ

火を噴く山がみえはじめ

そのすさまじい光芒のなかに

うずくまるのは

まだ生きているおれ

ドド

ドド

ドドド

火山灰の土砂は

海になだれこみ

馬の怨霊は

いま還ってきたのだ!

時間

申 有 人

日本人が見れば何と思うか。

私はいまも 年数回

「朱子家礼」が見れば顔背ける私流で
祖霊を祀る 祭祀ジユサを行っている。

父母の忌日来れば 夜

齋戒沐浴し 衣を正し

白きテーブルに季節の花一二輪活け

質素な何品かの祭饌を供え

温かい飯を井に盛り 箸と匙を並べ

「存ますが如く」

コップに酒を三度注ぎ

長男と拝礼すること三度。

慎しく 敬虔に。

三つの孫娘がニヤニヤ嗤っている

一千年の蜘蛛の巣を払い

いま なぜ

ニッポンで 祭祀ジユサか。

他民族の

贖罪スケイプゴートの山羊で

自らを肥え太らせる風土で

他所者を曝すことは死と繋る。

風葬に晒らされている

「オキナワ チョセンお断り」の貼紙。

私が私を消し

人間の廃品クラシッが息づく時

一千年の風霜に耐えて生き遣った

「祭祀ジユサ」は

私だけが知っている

ある奇跡を生んでくれる。

この風土で生きるかぎり 私は

自分の蜘蛛の巣を張ることを忘れぬだろう。

——自分の「タマシイ」を捕えるため——

わが机ある 壁に

葉書大の写真が

ピン止めしてある。

四人の幼ない子どもたちが

初老のおやじとおふくろを囲み

勝手気儘な方を向いて 勝手に喚き

白いワン公まで吠えている

和やかな家族風景のスナップか。

おくから

微かな音が流れ 次第に強く

世代の断層が

多声音階ポリフォニーの交響楽となって怒濤のように襲う。

子どもたちが消える……

おやじの膝に抱かれていた

末っ子のチビまで 一つのまに

自分の青空めがけて翔び立っていった。

だれ一人おやじの夢などみむきもしないで。

ピン止めされた二十年の時間が

待ちこがれたひとは

誰だったか？

異郷で生れ

自分の故郷知らぬ

放浪の末裔たちよ

空を

青く磨け。

二度と蜘蛛の巣が張らぬように。

時間がきた

行け。

注 朝鮮の冠婚葬祭の儀礼を儒教の礼制として朱子（一一二〇

一一二〇〇）が集大成する。その行事は多く虚飾的形式に
流れ、弊害も多く伴ったが、反面、社会の倫理風致を永く
培ったことは否定できない。

このごろ、枕許に フロシキ包みが置いてあるわけ

向井 孝

① 10月8日

「もしもしムカイコウさんのお宅ですか」

「コウさんおられますか」

「本人さんですか」

「曾根崎警察署ですが」

「曾根崎警察署警備課です」

「警備課のもんです」

「警備課のその係です」

「エート、昭和56年11月10日通貨及証券等模造取締法」
違反容疑で家宅捜査の際、一万円模造紙幣一枚を押収し
ましたが、あれどうされますか」

「当方で破棄処分になりますから」

「絶対返してもらいたい、いうことですね」

「いや、担当検事が、どうするか聞いてきてますので」

② 10月9日

「はい向井です」

「はい本人です」

「曾根崎署の」

「警備課の」

「その警備課の」

「イノウエさん、ですね」

「そら、承知できません」

「なんで勝手に処分しますねん」

「ぼくの方は、値上げでがっぽりもうけた関西電力を
ちよっとカラカッター。つまりふつうのピラや、おも
てますねん」

「模造紙幣かピラか、見解の相違きめるんは、裁判と
ちがいますのん」

「裁判なしで破棄するという法的根拠は」

③ 10月11日

「ムカイコウさんのお宅ですか」

「コウさんおられますか」

「本人さんですか」

「曾根崎署です」

「曾根崎署の警備課のもんです」

「そのイノウエです」

「押収した模造紙幣一枚は、理由「通貨及証券等模造
取締法第三条：何人ノ所有ヲ問ハズ警察官ニ於テ之ヲ破
毀スベシ」によって処分しますので」

「それ、もっとくわしく聞きたかったら、地検のサト
ー
検事さんまで来たら説明すると」

「うちの方は伝えるだけですから」

「そんなこと、もう切ります」

「切ります」

④ 10月18日

「中北弁護士事務所ですか」

「さっき電話もろたそうで」

「へえーそっちへも聞いてきたんですか。担当はサト
ー
という検事」

「破棄理由ききに、日当と交通費でるんやったらいく
けど、出えへんやろから文書で説明してほしい、言う
ときました」

「挑発なんてとても。行きがかりでいうたものの、内
心ビクビクもんですわ」

「そしたら、呼び出し状が来てますねんけど、用件の

ランが書いてないし、放つとききました」

「ほんまに、とつぜん、あの「赤瀬川原平模造千円札
事件」みたいに、時効2日前タイホされたりして」

「それでも、放つといったら困るんは、むこうさんの面
子だけでしょ」

「ほんなら、ま、時計がコチコチまわるんを毎日みて
まっさ」

⑤ 10月23日

「ゆうべ、無言電話が久しぶりにあったで」

「というたら、ふう子さんが「お守りつくつと
かんと、きつと来るわア」いうんで、肌着・

タオル類一式のフロシキ包みをこしらえて、
枕許に。」

⑥ 10月27日

⑦ 11月1日

⑧ 11月9日

悲哀

坂上 清

寝返りをうつと
わたしの顔をのぞき込む顔
顔の中の深い闇
の中に続いている階段
階段を降りていくと
海浜に出た
太陽がひとゆれして
沈んでいった
海に向って
歩く
まだぬくもりのある岩肌
くずれる砂
冷たい渚

波

奪われる自由
わたしはそのまま真直ぐ沖に向って
海の中を歩いていく
波しぶきが消え
しずかな圧力が全身をつつみ
あかるさが次第にとおのいて
重い重い世界がわたしをとりまく
夕ぐれの
眼ざめのあと
障子の白さに狼狽している

木枯し

雑木林の中から
ボロボロの姿で
傷だらけになって歩いてくる

喚きながら
走り回って
散々
あたりちらして
思うようにはならなかったらしい
やっとぬけ出してきて
やけっぱちの顔をしている風を見た

秋

暮尾 淳

やわらかな女たちのうでや胸もとが
秋のよそおいにかくれると
精巧な装置が水を送り
酸素が溶けつづける
ガラスのなかの

黒い魚のように、
ぼくの夏は沈み、
真蘆の上
燃えるロウソク片手に
ゆるやかに舞う
鎧姿の若武者の
見るべきほどのものは見つ
という呪文の
語りあい
尾髄骨をまさぐりあった
あの山あいの村の星影や
おまえのにおいは、
秋の色して、
リメイクの世界に入っていくのを
ゆるんだ靴下のゴムや
汚れたYシャツを気にしながら
喫茶店Gで
ぼくは知るのである。